

久留米城外郭

松田家屋敷跡

久留米市教育委員会

一九九七



天保年間久留米城下図

序 文

九州第一の長流である筑後川の中流、左岸に位置する久留米市は、古代から交通の要衝として発展を続けてまいりました。現在の市街地は、江戸時代に城下町としての大規模な整備が礎となっています。本市では、江戸時代の武家屋敷や町屋の調査を行うことにより、江戸時代の人々の生活状態や、町割りの状態を把握することに全力を挙げているところです。

今回、篠山校区公民館建設にあたり、事前に武家屋敷地の発掘調査を実施しました。その結果、武家屋敷における生活の断片を窺える数多くの資料を得ることができました。江戸時代の溝や穴蔵、廃棄坑などは、屋敷地の使用状態を明示していると言えます。

本書は十分な調査記録とは言えませんが、埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育や生涯教育の教材として、また、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

発掘調査に際しまして、多大なご理解のもとご協力をいただきました篠山校区公民館建設委員会の皆様をはじめ、篠山校区の関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 桑野善吾

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が平成8年度に発掘調査を実施した久留米市城南町22番地の28・29所在の久留米城外郭遺跡第2次調査（松田家屋敷跡）の記録である。
2. 発掘調査は文化財保護課の園井正隆が担当した。
3. 本書に掲載した図面の作成、遺構・遺物の写真撮影は園井が行い、浄書は米澤美詠子、副枝叶恵が行った。
4. 調査に関わる遺物・記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
5. 本書の遺構実測図に示した方位は、国土調査法第Ⅱ座標系をもとに作成し、すべて座標北を示す。また、遺構の略記号は、SB…建物、SD…溝、SK…土坑、SP…柱穴・ピット、SX…その他の遺構を示す。
6. 久留米城外郭松田家屋敷跡の遺跡調査番号は、199601である。
7. 本文の表中に記した5桁数字は、本市文化財保護課における遺物登録番号で、遺跡調査番号199601を省略したものである。
8. 遺物の時期と文献については、文化財保護課の大石 昇と水原道範の教示を得た。
9. 本書の執筆・編集は園井が担当した。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 調査の記録	3
IV まとめ	12
報告書抄録	

1 はじめに

1) 調査の経緯

篠山校区公民館長志岐義昭氏より、久留米市城南町22番地の28・29、開発面積400㎡に係る埋蔵文化財包蔵有無の確認依頼書が、久留米市教育委員会文化部文化財保護課に対して提出された。これを受けて試掘調査を実施した。試掘トレンチを南北に2本、東西に1本設定し、重機を用いて掘削した結果、近世の遺構の存在と遺物の出土を確認することができた。

その後、数度の協議を行い、調査期間・方法・面積・費用等において協議の成立をみた。平成8年3月19日に「発掘調査の依頼」が提出され、平成8年4月12日に法57条の2による「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

開発対象面積400.98㎡に対して、建造物の基礎が入る部分約176.1㎡を調査対象面積とした。調査期間は平成8年4月15日から7月1日までを現地における作業にあて、平成9年3月31日までを出土品整理および、記録類の整理期間にあてた。

また、調査が終盤にさしかかった6月12日には、篠山校区民を対象とした現地説明会を篠山公民館と久留米市教育委員会の共催で実施した。当日はあいにくの雨模様で、調査現場から市民会館に会場を変更したが、多数の参加を得ることができた。

2) 調査の体制

今回の調査にかかる組織体制は以下のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会 教育長 桑野 善吾
文化部長 川原 幸男

調査総括：文化財保護課長 古賀 幸男
主 査 萩原 裕房
埋蔵文化財主査 櫻井 康治

調査庶務：古賀 直喜 試掘調査：櫻井 康治

調査担当：園井 正隆

整理担当：米澤美詠子（非常勤）

校区公民館建設関係及び協力：篠山校区公民館建設委員会

会長 杉 茂
篠山校区公民館
館長 志岐 義昭
主事 倉八 優



第1図 市庁舎から筑後川を望む（調査区右下）



第2図 市民会館における説明会風景

調査にかかる作業の従事者は、以下のとおりである。

現地作業：大石マサコ・大塚チズ子・緒方ヨシ子・財木美智子・田中 樹子・田中レイ子・榎原 初美
半田 純香・藤木 幸子・丸山 幸・山崎キヌ子・吉田 常代・渡辺しげ子・渡邊やつ子
整理作業：荒巻 悦子・小川執津子・副枝 叶恵・福田 澄子・藤本 貴子・森山 明恵・龍 直美

なお、調査にあたって、井手測量建築事務所のご協力を得た。また、遺構については、名古屋市教育委員会 服部哲也氏に参考資料を提供していただいた。記して感謝の意を表します。

II 位置と環境

久留米城外郭遺跡は、久留米市の北西部に位置する城南町を主とした範囲を呈する。昭和21年に戦災復興事業に伴う久留米復興土地地区画整理の対象地となったが、外郭地区は武家屋敷地であったため、旧状を大きく変えることなく、南北道路の移設拡幅・新設と東西道路の新設に留まっている。

第2次調査地点は、江戸時代後期の天保年間図によると「松田」家屋敷に当たると推定できる。



久留米城外郭遺跡

1. 松田家屋敷跡
2. 佐々木家屋敷跡
3. 宮内家屋敷跡

久留米城下町遺跡

4. 三本松町遺跡
5. 両替町遺跡
6. 呉服町遺跡
7. 魚屋町遺跡
8. 田町遺跡
9. 庄島小路遺跡
10. 通町四丁目遺跡
11. 通町六丁目遺跡
12. 通町七丁目遺跡
13. 通町九丁目遺跡

第3図 久留米城関連遺跡調査地点位置図 (1/20,000)



第4図 延寶八年図 (1680)



第5図 天保年間図 (1830～1844)

Ⅲ 調査の記録

1. 調査の概要

天保年間図を参考にして対象地の位置を求めると、松田家屋敷地内であり、かつ、敷地の南東部に当たると推定し得た。屋敷地の北側の道路に面したところに門を設けており、調査地が屋敷の建物の奥手になることを調査の事前に予測することができた。

本調査は試掘調査の結果を踏まえて、対象地に12m×12mの正方形の調査トレンチを設定した。

調査に際しては、作業中の安全を考慮して、排土と道路の境に板塀を設けた。

調査は平成8年4月15日から実施した。重機を用いた表土剥ぎの後、上面の遺構検出に移った。検出面はトレンチの北西部で、表土から25～30cmであり、また、トレンチ東側では、表土から50cm程度で地山を検出しており、地山面の起伏が認められた。

試掘トレンチや戦災後の瓦などの廃棄坑によって遺構検出には手間取ったが、それらの新しい時期の掘形を完掘した後、土坑・穴蔵など江戸期の遺構が認められた。遺構状態は重複し合っているが、壁面等の残存状態は良好であった。

発掘に係る作業は北東隅から開始し、北半の遺構を掘り下げた後、東半の遺構、最後に南西部の遺構の発掘へと順次調査の歩を進めた。これも試掘調査の結果を参考とした。

調査中は段階的に発掘状況の概要を、図面を加えて説明し、現場プレハブ壁面、および、掲示板を使用して啓発に努めた。説明文を希望される方のためにリーフレットを作成して配布を行った。現地で調査について質問された方は30名を越える。

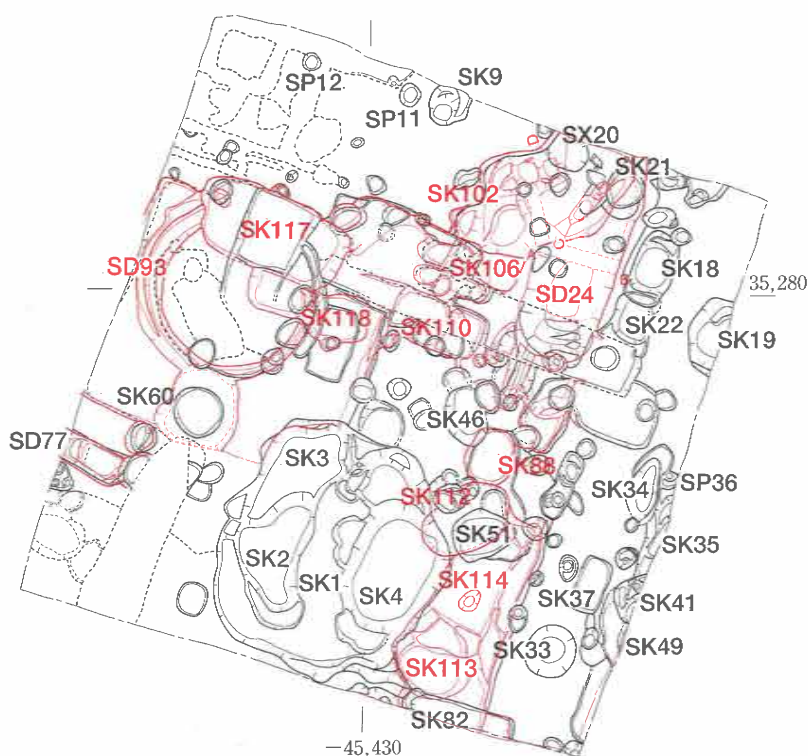
調査の結果、溝2条、穴蔵3基、土坑16基、その他建物の柱穴10個を検出した。

出土した遺物は、近世陶磁器、土師質の器類・型押しの人形、瓦、銭貨、銅製品などパンコンテナーに約50箱分を数える。

以下、遺構と遺物について説明を加え、今回の調査の成果から、近世の武家屋敷について考えてみることにする。



第6図 調査区全景（南上空から）



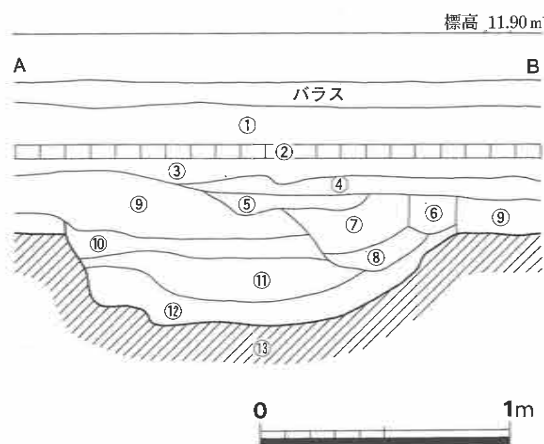
第7図 遺構配置図 (1/150)

2. 遺構の概要

本調査区の標準土層を確認するために、S K 19の土層と合わせて観察を行った。表土から遺構検出面に至る層（1～9層）は、炭・焼土・瓦片を多少とも包蔵している。1層は戦災時の焼土、および遺物が見られた。2・3層はセメント煉瓦と瓦を並べて床状をなす。5～8層は炭を含むピットである。9層は調査区全域に堆積し、明治期の遺物が含まれる。ただし、江戸期の遺物の細片も若干含まれている。

S K 19（第8・9図）

調査区の東側で検出した土坑である。調査区外へ延びており、全容の把握には至らなかった。長



- | | |
|------------------------|----------------------|
| ①暗茶褐色砂質土（木炭・焼土・瓦片混入） | ⑧濃黄褐色砂質土（焼土・炭多量混入） |
| ②セメント煉瓦 | ⑨暗黄褐色砂質土（焼土・炭・瓦少量混入） |
| ③暗黒褐色砂質土（瓦敷き・礫混入） | ⑩暗灰褐色砂質土（炭少量・鉄分沈着） |
| ④明茶褐色砂質土（炭少量混入） | ⑪淡灰褐色砂質土（炭少量・円礫混入） |
| ⑤淡茶褐色砂質土（炭・鉄分が微量混入） | ⑫明灰褐色砂質土（地山ブロック少量混入） |
| ⑥暗黄褐色砂質土（炭少量・地山ブロック混入） | ⑬灰黄色砂（地山） |
| ⑦黄褐色砂質土（焼土・炭多量混入） | |

第8図 S K 19土層実測図（1/30）



第9図 S K 19（西から）

軸は158cmで、短軸は現存長で74cmを測る。西半部から平面形推測すると楕円形を呈すると考えられる。深さは39cmで、底面は平坦な面を持つ。17世紀後半から18世紀前半代の遺物が主として出土した。

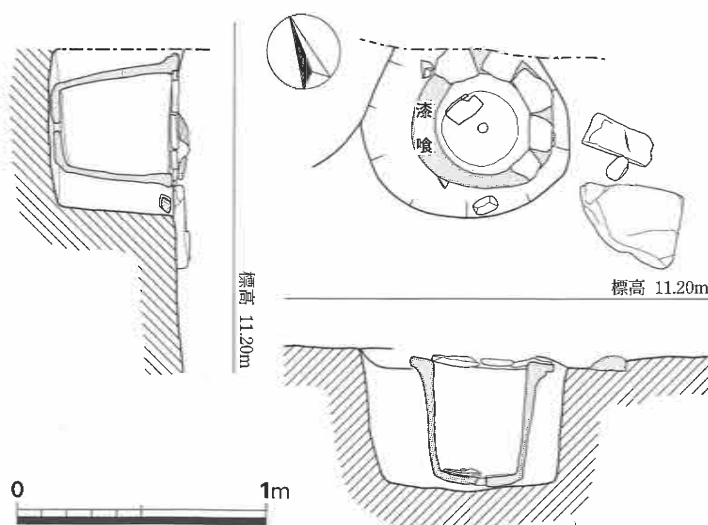
S X 20（第10・11図）

調査区の北側で、略円形の掘形の中に幅8.5cmで円形の漆喰帯を検出した。漆喰帯の内部には多量の漆喰片が落ち込み、帯の上部にも漆喰の構造物が乗っていたと判断できる。その漆喰片を復元すると朝顔形に開いている。また、漆喰帯の内部

は上方径40cm、底部径28cm、深さは40cmのバケツ状をなす。底面には直径4.5cmの穿孔を認めた。水溜枳の機能を失った際に穿いたと考えられる。



第10図 S X 20（北から）



第11図 S X 20実測図（1/30）



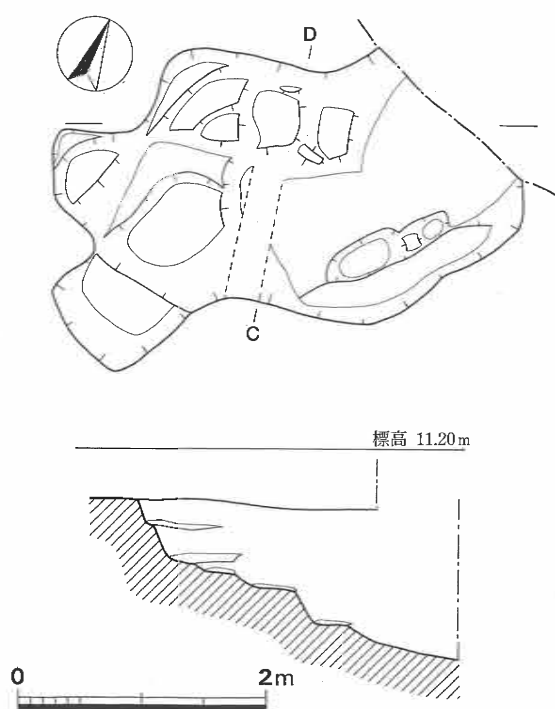
第12図 SK 4・112～114（南から）

SK 4（第12図）

調査区の中央やや南寄りに位置し、上面のSK 1を完掘後に検出した。270cmの長軸は北東を示す。短軸は68cm、現存深さは91cmを測る。プランは隅丸長方形で、底面は平坦をなす。埋土は茶褐色粘質土で鉄分の沈着が著しい。18世紀代の遺物に人の門歯なども混在する。廃棄土坑の性格を持つ。

SK 102（第13・14図）

SK X20の下面で検出した。平面形は不整形を呈するが、西側から東へ5段の階段を有する。3段目で南へ降りる階段が



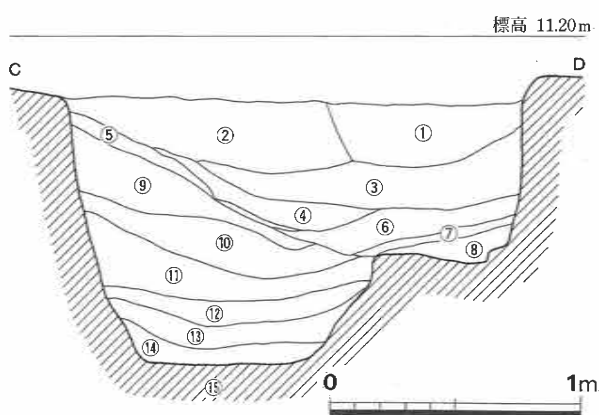
第13図 SK 102実測図（1/60・1/30）

1段設けられ、1 m四方程度の空間がある。また、東への階段を降り切ると幅70cm、長さ170cm以上の空間が広がる。東壁の底面では板材を立てたと思われる掘り込みを検出した。18世紀代の磁器碗や皿、陶器片などが出土した。貯蔵を目的とした穴蔵である。

この他に検出した穴蔵は、SK 113・114がある。両方とも調査区の南東部で検出した。

SK 113（第12図）

長軸は150cm、短軸は110cm、深さ110cmの規模を持つ。隅丸長方形のプランを有し、壁面はオーバークラフ感で、黒褐色砂質土のみで埋められている。17世紀後半～18世紀前半にあてられる。



- | | |
|------------------|-----------------|
| ①暗茶褐色砂質土（鉄分沈着） | ⑨暗黒褐色砂質土 |
| ②茶褐色砂質土 | ⑩暗茶褐色砂質土（瓦多量混入） |
| ③黒褐色砂質土（若干の鉄分沈着） | ⑪濃茶褐色砂質土（軟質土） |
| ④灰褐色砂質土 | ⑫暗黄褐色砂質土 |
| ⑤黄褐色砂質土 | ⑬黄灰色砂 |
| ⑥暗灰褐色砂質土 | ⑭青灰色砂 |
| ⑦明茶褐色砂質土 | ⑮灰黄色砂（地山） |
| ⑧黒色砂質土 | |



第14図 SK 102（北東から）

S K 114 (第12図)

S K 113 を切っている。
長方形のプランで、長軸
210cm、短軸127cm、深
さ115cmの規模である。
床面は平坦を呈し、壁面
は直に立ち上がる。埋土
は茶褐色砂質土が大半で
ある。18世紀代の穴蔵と
考えられる。



第15図 S D 24 (南から)

S D 24 (第15～17図)

S K 102に切られた状態で検出した。南北走向の溝である。溝上端幅は170cm、下端幅は70cmを測り、検出長は3.3mである。検出面から最深部までは82cmである。土層の状態を観察すると、3～12層は溝の廃絶に伴う埋土と考えることができる。9層から胎土目跡を有する唐津焼の皿や甕が、正立状態で出土している。13～14層は粘質の腐食土が堆積しており、溝の機能を果たしている時期に比定されよう。16世紀代の溝と考えられる。溝の方位はN-27°-Eを示す。

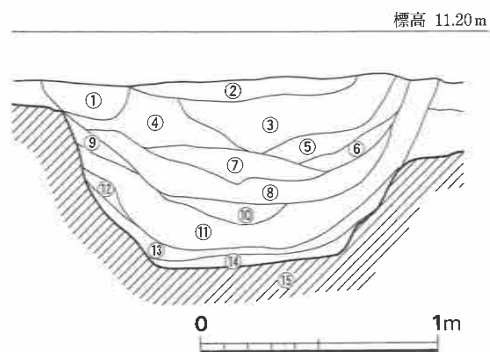
S D 77

調査区南西隅で検出した東西走向の溝である。溝は、調査区外と試掘トレンチによって西も東も寸断され、約170cmの検出長である。溝幅は80cm、深さは42cmである。断面形状はコの字形をなし、埋土は粘りのある明茶褐色土が充填していた。遺物には端反碗・陶器の水注・銅銭などがある。特に、銅銭は3枚が密着したまま出土し、外側の2枚は「天聖元寶」(1023年初鑄)と「大觀通寶」(1107年初鑄)であることが判明したが、中の1枚は不明である。19世紀前半～幕末に使用された溝と思われる。

遺物には端反碗・陶器の水注・銅銭などがある。特に、銅銭は3枚が密着したまま出土し、外側の2枚は「天聖元寶」(1023年初鑄)と「大觀通寶」(1107年初鑄)であることが判明したが、中の1枚は不明である。19世紀前半～幕末に使用された溝と思われる。

3. 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、パンコンテナで50箱分を数える。ここで紹介する遺物は、遺構の時期を決定する遺物と異なる時期に流れ込んだ遺物を渾然と記載した。そのため、16世紀末の遺物から幕末に至る遺物が同一遺構の欄に入っている。表記の遺物番号と図版中の番号は同一にしている。なお、遺物の登録番号は表の右端に記している。紙面の都合で極一部の資料紹介となったことをお詫びしたい。



- ①明茶褐色砂質土 (炭多量混入) ⑨灰黄色砂質土 (地山一部混入)
- ②暗茶褐色砂質土 (黄色砂を含む) ⑩明灰黄色砂質土 (鉄分沈着)
- ③暗黄褐色砂質土 (地山ブロック混入) ⑪淡茶褐色砂質土 (細かい粒子)
- ④淡黄褐色砂質土 (砂質で緻密) ⑫黄色砂質土 (黄褐色地山混入)
- ⑤明黄褐色砂質土 (鉄分沈着) ⑬紫褐色粘質土 (粘質が強い)
- ⑥濃黄褐色砂質土 (炭混入・軟質) ⑭青灰色粘質土 (腐植土混入)
- ⑦黒褐色砂質土 (炭・焼土混入) ⑮白黄色砂 (地山)
- ⑧黒色砂質土 (炭多量混入)

第16図 S D 24土層実測図 (1/30)



第17図 S D 24土層状態 (南から)

第1表 出土遺物一覧表①

図版	出土遺構	器種	法 量		装 飾		銘・印	産地	年 代	備 考	通 物登録番号
			口径	底径	器高	文 様					
19図(1)	SD24	陶器 皿	124	—	▼ 32	口縁鉄釉					00037
"	"	"	125	4.1	38	灰釉			180後～190前	筒形	00137
19図(2)	"	" 甕	—	14.6	▼ 71				180後～190前		00138
"	"	" 大皿	—	—	—	灰釉				見込に3個の目跡	00139
"	"	"	—	—	—	灰釉					00140
19図(1)	"	土師器 埴輪蓋	80	47径	16				180前		00141
19図(2)	"	瓦質 搦鉢	—	—	—					橋状の把手	00142
"	"	陶器 "	115	—	—	口縁鉄釉					00143
19図(1)	"	土師器 灯篭皿	48	4.2	24						00144
"	"	"	4.8	4.4	23						00145
"	"	"	8.8	4.0	22				180後～190前		00146
19図(2)	"	瓦質 火鉢	—	—	132						00147
20図(7)	SK35	磁器 碗	115	4.9	50	染付		関西系	180前～中	ミニチュア	00149
"	"	土師器 灯明皿	6.8	4.1	12						00150
"	"	" 人形	—	—	▼ 26						00151
SK73	"	磁器 盆	7.6	—	45	染付					00152
"	"	" 皿	21.0	7.5	35	染付					00153
"	"	" 小皿	8.1	3.75	17	、紗縹形文	六角皿				00154
"	"	" 蓋	8.6	3.6	15	"	六角皿		唐津	胎土目	00155
"	"	" 散華	—	—	15	"	端反	"	"	胎土目	00156
"	"	" 鉄	長16.9	—	—	"	草花文	内野山系	70末～180前		00157
"	"	"	長7.3	—	—			関西系		つまみ欠損	00158
"	"	銅 かんざし	長13.6	—	—				180中～末		00159
"	"	滑石 石筆	長▼ 19	短0.8	厚0.8						00160
20図(10)	"	磁器 小皿	10.8	6.0	20	染付					00161
"	"	陶器 水滴	5.7	4.3	31	灰釉					00162
"	"	" 瓶蓋	2.4	1.1	14	鉛釉				両手	00163
19図(14)	"	" 土瓶	8.3	5.3	▼ 102	銅緑釉	型押成形				00164
"	"	" 台	—	—	—		注口窯変				00165
20図(10)	"	" ハマ	7.8	—	14						00166
20図(8)	SK77	磁器 碗	9.4	4.4	45	染付	花唐草文				00167
"	"	"	—	3.6	▼ 48	"	岩に花卉				00168
"	"	"	4.4	8.8	4.1	"				油煙	00169
"	"	" 盃	4.5	2.5	28	白磁					00170
20図(9)	"	" 皿	—	—	—	染付					00171
20図(8)	"	" 蓋	5.0	3.2	14	灰釉					00172
"	"	" 乗覆	4.4	3.4	39	灰釉					00173
"	"	陶器 碗	8.7	3.15	45					角型	00174
20図(19)	"	" 盃	—	—	—	赤絵					00175
"	"	" 水注	8.9	8.55	144	鉄絵				三つ巴文	00176
20図(19)	"	土師器 箱庭具	長3.7	短2.0	厚1.6		型押				00177
"	"	銅 銭貨	2.4	—	—						00178
"	"	"	"	"	"					寛永通寶(新)	00179
"	"	"	"	"	"						00180
"	"	"	"	"	"						00181
19図(5)	SK102	磁器 碗	10.4	4.2	5.8	染付	花唐草文				00182
19図(4)	"	"	10.2	4.4	5.9	染付	藤花			桃	00183
19図(5)	"	"	13.4	5.2	6.1	染付	丸に桐			サビ付着	00184
"	"	" 小碗	8.0	3.0	2.1	染付	菊文				00185
"	"	"	7.9	2.7	2.2	染付	菊花文			焼けた後あり	00186

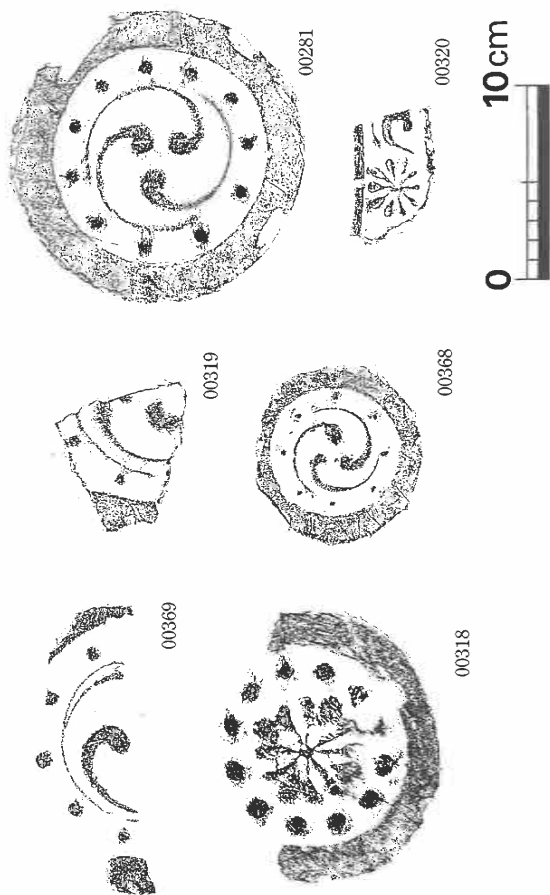
▼残存値

第2表 出土遺物一覧表②

図版	出土 遺構	器 種	法 量			器 種	装 飾			銘・印	産地	年 代	備 考	遺 物 登録番号
			口径	底径	器高		文 様	文 様	その他					
	SK102	木製品	長80 短27 厚1.0	4.0	16.5	土師器 七厘	結付・襷							00265
	〃	〃	長54 短2.5 厚0.8	〃	7.0 24.5	〃 煤炉	〃							00266
	〃	〃	長132 短3.7 厚1.1	〃	101 3.7	磁器 碗	染付 白磁	梅・香松の文		大明年製	肥前	18C		00267
	〃	〃	長113 短1.9 厚2.0	〃	104 4.1	〃	〃	口紅			肥前	18C後		00268
	〃	〃	長110 短0.5 厚1.0	〃	131 7.5	〃 皿	染付 白磁	戦国・徳川・文政期			〃	18C後		00269
	〃	〃 櫛	長4.5 4.5 0.4	〃	〃	〃 碗	〃	口紅			〃	17C	柿エ門様式	00270
	〃	〃	長2.3 0.9	〃	5.4 5.3	瓦 面子	〃	三つ巴文						00271
	〃	〃	27.0 7.2 0.5	〃	4.0 10.2	磁器 蓋	染付 白磁	鹿の子文に龍	型紙刷	吉		明治		00272
19図(7)	〃	窯道具 トン	長4.9 短3.7	4.1	7.8 4.0	〃 湯飲	染付 白磁	山水文			肥前	幕末		00273
20図(11)	SK112	磁器 碗	9.2 3.71 4.9	4.5	15.6 5.8	〃 鉢	染付 白磁	草花文			肥前		5足ハマ日跡	00275
〃	〃	〃	11.0 4.08	4.5	2.0 3.5	〃 髪盤	〃	薄文陰刻	口紅					00276
〃	〃	〃	10.0	〃	6.0 2.5	〃 新神酒徳利	〃	赤絵		御神前				00277
〃	〃	〃	9.7 4.7	6.7	4.5 6.0	陶器 碗	〃	色絵		有 不明	関西系		徳川・文政期	00278
〃	〃	〃	9.0	3.0	2.5 2.7	〃 蓋	〃	黒釉					相模	00279
〃	〃	〃 蓋	3.3 8.8	2.4	3.5 4.2	土師器 人形	〃	1.4						00280
〃	〃	〃	3.2 8.8	2.4	15.2 15.4	瓦 軒丸瓦	〃		三つ巴文 珠文11個					00281
20図(13)	〃	〃 盃	6.6 3.1 4.4	染付	39.4 14.2	〃 鉄釘	〃	2.8						00282
〃	〃	〃	7.2 3.4 4.7	染付	長10.6	〃 包丁	〃	〃						00283
〃	〃	〃	6.5 2.9 4.3	染付	長11.0	〃	〃	〃						00284
〃	〃	〃	6.9 3.2 4.0	染付	2.5	銅 銭貨	〃	〃	寛永通寶(新)				1697年初鑄	00285
20図(12)	〃	陶器 皿	4.5	1.5	厚0.9	〃 磁石	〃	〃						00286
〃	〃	〃	9.5 5.0 1.9	染付	11.0 4.8	磁器 碗	〃	5.9	牛・か	湯福	肥前	18C		00287
〃	〃	〃	11.8 5.9 1.8	白磁	10.0 4.0	〃	〃	5.8	青海波に草花文	型紙刷		明治		00288
〃	〃	〃	11.6 5.9	2.1	3.6 5.9	〃	〃	5.9	戦国・徳川・文政期		肥前	18C後		00289
20図(13)	〃	〃 瓶	〃	〃	7.0 4.1	〃 湯飲	〃	6.3	園線			明治	コーヒーカップ形	00290
20図(12)	〃	〃	〃	〃	7.5 4.9	〃 猪口	〃	5.8	牡丹		肥前	18C後		00291
〃	〃	〃	4.5	1.5	8.4	〃 湯飲	〃	5.6	雪の輪文		肥前	18C後～19C		00292
20図(13)	〃	〃 植鉢	11.0 7.7	8.5	6.6 2.5	〃 盃	〃	4.5	園線文	吉	〃・美濃	幕末～明治		00293
〃	〃	〃	6.3 2.9 4.8	色絵	6.6 2.9	〃	〃	4.5	染付		肥前	幕末～明治		00294
20図(12)	〃	〃	7.0 2.5	2.8	6.6	〃	〃	4.8	色絵		〃・美濃	明治		00295
20図(11)	〃	〃	10.8 5.7	2.0	5.1 3.2	〃	〃	3.0	白磁					00296
20図(13)	〃	〃	8.4	〃	13.6 8.0	〃 皿	〃	4.4	染付			18C中～後		00297
20図(13)	〃	〃 御神酒徳利	2.0	〃	7.4	〃	〃	1.6	染付	湯福		18C		00298
〃	〃	〃 散蓮華	〃	〃	7.5	〃	〃	2.0	染付	有		18C前		00299
〃	〃	陶器 蓋	8.3 6.0	2.9	8.0	〃 碗	〃	3.0	染付	湯福		17C末～18C前		00300
〃	〃	〃	6.0	〃	9.4 4.9	〃 皿	〃	2.0	染付	型押	〃・美濃	明治		00301
20図(15)	〃	土師器 人形	3.0 2.3	2.9	14.0 7.7	〃 皿	〃	5.2	染付	湯福		18C前		00302
〃	〃	〃	2.6 1.2	2.6	〃	〃 段重	〃	7.1	染付			明治		00303
〃	〃	〃	2.1 1.4	2.0	4.4 1.5	〃 紅皿	〃	1.4	白磁					00304
〃	〃	〃	2.5 1.1	2.4	6.1	〃 花生	〃	11.2	白磁	型押成型				00305
〃	〃	〃	4.5 4.5 4.7	〃	11.4	陶器 碗	〃	4.3	色絵	型押成型				00306
20図(13)	〃	〃 磁石	〃	〃	〃	〃 磁器 碗	〃	4.4	〃		関西系	18C		00307
20図(15)	〃	〃 切羽	長3.8 短2.2 厚0.2	〃	〃	〃 皿	〃	2.0	〃		肥前		見込の彫刻の上に色	00308
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 仏飯具	〃	5.1	〃		肥前	18C～19C		00309
〃	〃	〃	〃	〃	〃	陶器 湯飲	〃	5.1	灰釉		肥前	18C～19C		00310
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 皿	〃	〃	〃		朝妻焼	18C前		00311
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 面子	〃	2.7	灰釉				大皿を転用	00312
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 土瓶	〃	8.3 5.3	銅緑釉				00092と接合	00314
〃	〃	〃	〃	〃	〃	土師器 土鈴	〃	7.5 3.2	〃				寒水ガラスカラ	00316

第3表 出土遺物一覧表③

図版	出土遺構	器種	法量		装飾		銘・印	産地	年代	備考	遺物登録番号
			口径	底径	器高	裝飾					
19図(14)	SK115	土師器 台	—	—	92						00317
19図(15)	"	軒丸瓦	142	—	20	木瓜文 珠文12箇				瓦上に穿孔有、転用痕	00318
"	"	"	—	—	20	三つ巴文					00319
"	"	軒平瓦	—	—	19	中心飾 菊花文					00320
20図(1)	"	銅 煙管	長 5.7	最大径10.0	0.6					吸口	00321
"	"	銅 飾金具	直径 2.0	—	2.1	線刻文有				金メッキ有	00322
"	"	" 銭貨	直径 2.6	—	—	不明				緑青を吹く	00323
"	"	磁器 滑車	直径 4.7	—	1.1					一カ所磨滅し平坦	00324
"	"	ガラス カンザシ	直径 2.6	0.4	—						00325
"	"	ガラス カンザシ	直径 2.6	0.4	—						00326
"	"	磁器 皿	—	—	—	染付		英国		SK112NO.0260と同一個体	00327
"	"	滑石 石筆	直径 4.7	0.7	—					朱地漆	00328
"	"	漆片	—	—	—						00329
"	"	陶器 甕	37.2	25.7	42.0					角型	00330
"	"	土師器 埴炉	27.0	14.5	26.9						00331
20図(2)	SK117	磁器 碗	11.0	3.6	5.3	龍文 見込龍文	元	肥前	19C前		00335
"	"	陶器 盃	7.5	2.8	3.5	灰釉		肥前	18C		00336
"	"	磁器 "	7.4	3.0	3.8	笹文		肥前	18C		00337
"	"	" 湯飲	8.2	4.0	6.4	呂南文 見込五分花		肥前	18C後～19C		00338
"	"	"	7.8	4.0	5.8	若松文 見込若字文		肥前	18C後～19C		00339
"	"	" 仏飯具	7.2	3.6	4.9	白磁		肥前	18C		00340
"	"	" 盃	—	—	2.1	色絵		肥前	18C中～19C		00341
"	"	陶器 碗	12.0	3.5	4.5	色絵		関西系	18C後～19C		00342
"	"	" 皿	13.2	8.7	4.6	色絵					00343
"	"	" 蓋	12.3	8.5	3.8	鉄釉					00344
"	"	" 灯明皿	7.4	5.0	1.2					底部糸切り跡	00345
20図(3)	SK119	磁器 碗	—	4.4	2.0	龍目文 見込龍目文	芭蕉				00346
"	"	"	11.6	4.6	5.5	草化文 見込十字化					00347
"	"	"	10.0	3.7	5.0	梵字文			18C		00348
"	"	"	11.4	4.6	5.9	牡丹と丸に青海波			1700～1780		00349
"	"	"	9.4	4.4	4.7	仙芝祝寿文	端反	肥前・美濃	19C代		00350
"	"	"	7.4	3.5	4.4	口紅					00351
"	"	"	9.4	—	4.2	若松文			18C後		00352
20図(14)	"	" 蓋	4.4	10.4	3.2	見込丹形松竹梅文			1700～1780		00353
"	"	" 盃	5.2	—	2.6	菊文			19C		00354
"	"	" 紅皿	5.7	2.4	1.6	白磁					00355
"	"	" 瓶	直径 1.8	4.0	10.4	蛸唐草に松竹梅文					00356
"	"	" 香炉	10.0	4.6	5.3	雨龍文					00357
"	"	" 火入れ	—	5.5	5.4	青磁					00358
20図(3)	"	陶器 碗	9.2	2.8	5.4	鉄絵					00359
20図(14)	"	"	—	5.5	3.2	灰釉				割高台	00360
20図(3)	"	"	—	3.5	5.1	透明釉		美濃・信濃	18C～19C		00361
20図(14)	"	" 瓶	—	—	13.4	灰釉					00362
"	"	" 蓋	10.7	7.5	4.5	褐釉				ボタン型つまみ	00363
20図(6)	"	土師器 人形	—	—	3.7					上半部欠損	00364
"	"	"	3.3	2.2	1.0	武士				柱姿座像	00365
"	"	" 土鈴	直径 4.6	—	—					下半欠損	00366
"	"	" 土鈴玉	長 1.4	—	—						00367
20図(5)	"	埴丸瓦	9.3	—	1.1	三つ巴文 珠文					00368
"	"	軒丸瓦	—	13.6	1.6	三つ巴文 珠文16箇					00369



第19図 出土遺物①



(1) S D24出土遺物①

(2) S D24出土遺物②

(3) S K113出土遺物



(4) S K102出土遺物①

(5) S K102出土遺物②

(6) S K102出土遺物③



(7) S K102出土遺物④

(8) S K102出土遺物⑤

(9) S K114出土遺物①



(10) S K114出土遺物②

(11) S K114出土遺物③

(12) S K115出土遺物①



(13) S K115出土遺物②

(14) S K115出土遺物③

(15) S K115出土遺物④

第20図 出土遺物②



(1) S K 115出土遺物⑤

(2) S K 115出土遺物⑥

(3) S K 117出土遺物



(4) S K 119出土遺物①

(5) S K 119出土遺物②

(6) S K 119出土遺物③



(7) S K 119出土遺物④

(8) S K 35出土遺物

(9) S K 77出土遺物①



(10) S K 77出土遺物②

(11) S K 73出土遺物

(12) S K 112出土遺物①



(13) S K 112出土遺物②

(14) S K 112出土遺物③

(15) S K 112出土遺物④

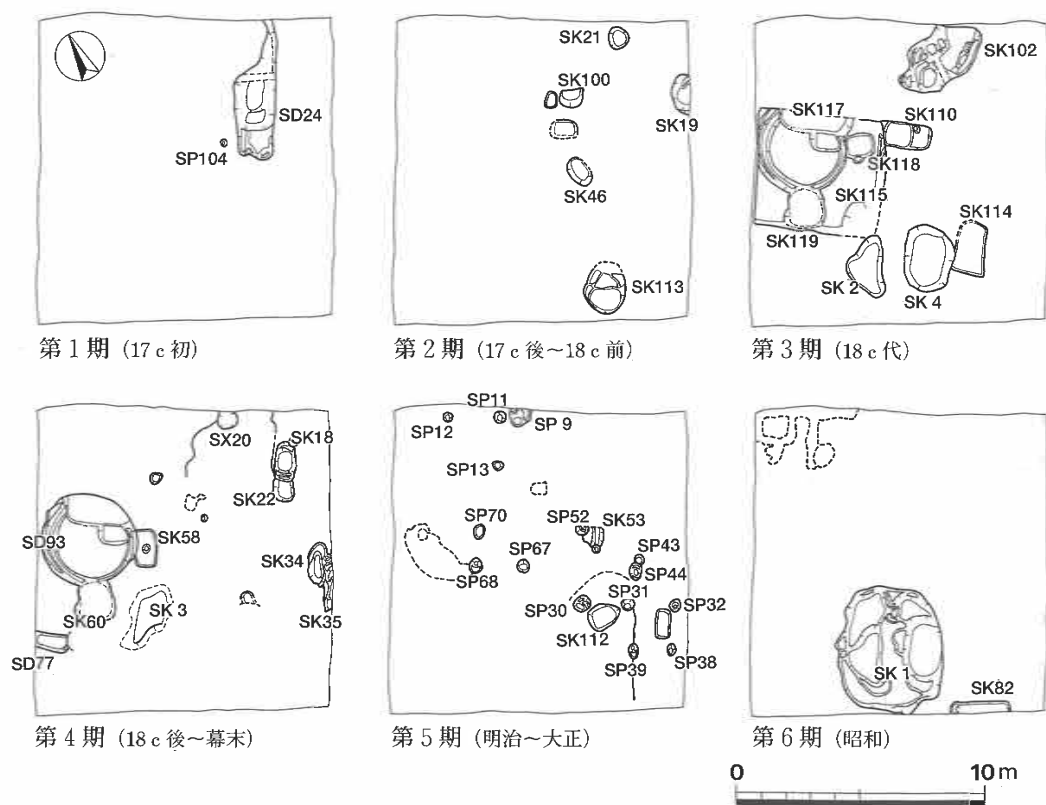
IV まとめ

久留米城下の建設および改造は、戦国期から江戸期にかけて、毛利氏 (1587～1600)、田中氏 (1601～1620)、有馬氏 (1621～1868) の手によって行われている。特に、元和 7 年 (1621) の有馬豊氏による城下町の大改造は、本丸・二の丸・三の丸・外郭を外堀で画して城内を整備し、城下においては町屋の建設に力を注いでいる。江戸時代前期に行われた土地割りは、現在の市街地に面影を多く残している。

今回の調査地は外郭地区に位置する。延宝 8 年 (1680) 図では、「富嶋左助」屋敷地に当たり、天保年間 (1830～44) 図では「松田」家屋敷地内に当たる。富嶋家は、『御家中略系譜』によると間口 17 間半・奥行 27 間で 350 坪の屋敷面積を与えられている。150 年後の松田家も富嶋家の敷地を踏襲していると考えられる。屋敷の門は北側に設けられているため、母屋の南東側を調査したことになる。

検出遺構の時期は、主要遺構を第 1～6 期に分けて変遷図に記した。第 1 期の S D 24 は、平成 6 年度に調査を実施した外郭 1 次調査 (佐々木家屋敷跡) の S D 2 と同時期であり、かつ、直行関係に当たる。田中期以前に祇園寺を核とする集落の溝と考えられよう。町屋遺跡 (両替町・呉服町・魚屋町・築島町) から 16 世紀にかかる遺構が検出されており、城下町形成前の状況を面的に把握する必要がある。第 2 期に S K 19 を入れている。多量の細片と炭が混在して出土し、火災後の廃棄坑と考えられる。元禄 9 年 (1696) の大火 (白石火事) によって富嶋家も残らず焼失している。火災層は認められなかったものの、S K 19 以外にも廃棄土坑の存在が考えられる。第 3 期には S K 102・114 の穴蔵が相当する。前者は階段を付設した複数の部屋を有するが、後者は単室で梯子を用いたと考えられよう。庭先と言うより畑地の隅に設けた穴蔵であろうか。第 4 期は S X 20 や S D 77・S K 35 といった遺構が認められる。S X 20 は漆喰で形を整えたもので名古

屋城三の丸の調査においても規模の違いはあるが同様な遺構が、検出されている。溜水用の容器としての機能を持ち、廃棄する際に穴を穿ったのであろう。第 5 期は瀬戸・美濃系の陶磁器や



第21図 遺構変遷図 (1/100)

釉下彩の磁器を主体に出土した遺構である。また、根石を詰めた浅いピットを11個検出した。江戸期の建物の増築か、建物の位置を変えて新築されたものか判断の材料はない。柱間は190～200cmの範囲で収まっている。第6期はS K 1・82の戦災の廃棄坑が主である。瓦・陶磁器・金属類は全て火を受け、焼土と共に出土している。

出土遺物に目を転じると、軟質の西洋磁器の破片が2点出土している。これはイギリス製の銅版染付のウイローパターン皿で、2点の破片は同一固体となる。本市における出土例は、久留米城外郭遺跡第1次調査（佐々木家屋敷跡）＝W、アダムス&サンズ窯、久留米城下町遺跡田町遺跡＝マーストリヒト、レグート窯、魚屋町遺跡＝ドーソン窯の3遺跡である。西洋陶磁器については、図柄・製作地・流通経路およびその史的背景など、改めて調査を要する。

武家屋敷地の使用状況の一端を把握できたことが、今回の調査における成果と言えよう。城内の武家屋敷の調査は2件目で、不明な点が多く、生活状態を復元するには至らない。しかし、将来多くの知見を得ることによって、武家の生活状態を少なからず解明できるものと信じたい。

参 考 文 献

- 1.『久留米市誌 下編』 昭和7年 久留米市
- 2.『久留米市史 第8巻』一資料編 近世Ⅰー 平成5年 久留米市
- 3.『久留米市史 第9巻』一資料編 近世Ⅱー 平成5年 久留米市
- 4.『久留米藩政治経済史年表』昭和51年
- 5.『日本史年表』 1962 河出書房新社
- 6.『研究紀要 第1号』 1984 神戸市立博物館
- 7.『名古屋城三の丸遺跡』 名古屋市教育委員会
- 8.『柴田コレクションⅠ～Ⅳ』 平成2・3・5・7年 佐賀県立九州陶磁文化館
- 9.『国内出土の肥前陶磁』 昭和59年 佐賀県立九州陶磁文化館
- 10.『久留米城外郭 佐々木家屋敷跡』 久留米市文化財調査報告書 第96集 1995 久留米市教育委員会

報 告 書 抄 録

ふ り が な	く る め じ ょ う そ と ぐ る わ い せ き			だ い 2 じ ょ う さ		ま つ だ け や し き あ と		
書 名	久 留 米 城 外 郭 遺 跡			第 2 次 調 査		松 田 家 屋 敷 跡		
シ リ ー ズ 名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 124 集							
編 著 者 名	園 井 正 隆							
編 集 機 関	久留米市教育委員会							
所 在 地	〒 8 3 0 福岡県久留米市城南町 1 5 - 3 ☎ 0 9 4 2 - 3 0 - 9 2 2 5							
発 行 年 月 日	西暦 1 9 9 7 年 3 月 3 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯 ° , ' , ''	東緯 ° , ' , ''	調 査 機 関	調査面積 ㎡	調査の原因
く る め じ ょ う 久留米城 そとぐるわいせき 外郭遺跡	ふくおかけんく る め し 福岡県久留米市 じょうなんまち 城南町22番地の 28・29	40203	199601	33度 19分 02秒	130度 30分 42秒	1996年4月15日 ～1996年7月1日	176	校区公民館建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
久留米城 外郭遺跡	集落	江戸時代	溝 …………… 2条 穴蔵 …………… 3基 土坑 …………… 16基		近世陶磁器・土師器・瓦・ 銭貨・銅製品・西洋軟質磁器 木製品・鉄製品		武家屋敷の裏側から穴蔵や廃棄 土坑を検出した。江戸初期から 昭和に至る遺構を6期に分割し た。	



明治初期の久留米城本丸（南西から望む）

久留米城外郭遺跡
— 第2次調査 —
松田家屋敷跡

久留米市文化財調査報告書 第124集
1997年3月31日

発行：久留米市教育委員会
〒830 久留米市城南町 15-3
編集：文化庁文化財保護課
〒830 久留米市城南町 15-3
☎ 0942-30-9225

印刷：株式会社 東 広
〒839 久留米市御井旗崎五丁目1-20
☎ 0942-43-9513